

引用文献

- DARROW, G. M. 1929. Development of runners and runner plants in the strawberry. U. S. Dept. Agr. Tech. Bull. 122: 1-28.
- ERIKSSON, O. 1985. Reproduction and clonal growth in *Potentilla anserina* L. (Rosaceae): the relation between growth form and dry weight allocation. *Oecologia* 66: 378-380.
- , 1986. Mobility and space capture in the stoloniferous plant *Potentilla anserina* Oikos 46: 82-87.
- , 1988. Ramet behaviour and population growth in the clonal herb *Potentilla anserina*. *J. Ecol.* 76: 522-536.
- HOLLER, L. C. and ABRAHAMSON, W. G. 1977. Seed and vegetative reproduction in relation to density in *Fragaria virginiana* (Rosaceae). *Amer. J. Bot.* 64: 1003-1007.
- 北村四郎, 村田 源, 1961. 原色日本植物図鑑, 草本編(中) p. 130-136. 保育社, 大阪.
- LESHEM, Y. and KOLLER, D. 1964. The control of flowering in the strawberry *Fragaria ananassa* DUCH. 1. Interaction of positional and environmental effects. *Ann. Bot. N. S.* 28: 569-578.
- and ——, 1965. The control of runner development in the strawberry *Fragaria ananassa* DUCH. *Ann. Bot. N. S.* 29: 669-708.
- 牧野富太郎, 1956. 牧野植物一家言 p. 148-149. 北隆館, 東京.
- NARUHASHI, N. 1968. Two new varieties of *Potentilla* (Rosaceae). *Acta Phytotax. Geobot.* 23: 95-99.
- , 1981. A new hybrid of *Potentilla* (Rosaceae). *J. Phytogeogr. & Taxon.* 29: 29-31.
- , SATO, T. and SUGIMOTO, M. 1990. Two types of runners in *Fragaria*. *J. Phytogeogr. & Taxon.* 38: 65-66.
- and SUGIMOTO, M. 1986. A natural hybrid of *Duchesnea* (Rosaceae). *J. Phytogeogr. & Taxon.* 34: 11-14.
- , —— and SATO, T. 1989. Runners of two Nepalese species of *Fragaria*. *J. Phytogeogr. & Taxon.* 37: 101-106.
- 小倉洋志・木村中外, 1980. ヘビイチゴ属2種における花序. *植物研究雑誌* 55: 270-279.
- ROUSI, A. 1965. Biosystematic studies on the species aggregate *Potentilla anserina* L. *Ann. Bot. Fenn.* 2: 47-112.
- 佐藤 卓・鳴橋直弘, 1978. 日本産キジムシロ群の分類. 2. 生活環と物質経済. *北陸の植物* 25: 210-208.
- ・杉本 守・鳴橋直弘, 1988. オランダイチゴ属4種のランナーの節間長の変化. *植物地理・分類研究* 36: 54-58.
- SMITH, C. C. 1972. The distribution of energy into sexual and asexual reproduction in wild strawberries (*Fragaria virginiana*). *Proc. 3rd Midwest Prairie Conference* p. 55-60. Kansas State Univ., Manhattan.
- 杉本 守・鳴橋直弘, 1981. 物質分配からみたヘビイチゴ属2種の生活. *植物地理・分類研究* 29: 85-90.
- ・佐藤 卓・鳴橋直弘, 1987. キジムシロ連植物数種のランナーの比較. *植物地理・分類研究* 35: 171-178.
- YU, Te-Tsun (ed.). 1985. *Flora Reipublicae Popularis Sinicae* vol. 37 p. 233-331. Science Press, Peking.
- WHITE, P. R. 1927. Studies of the physiological anatomy of the strawberry. *J. Agr. Research* 35: 481-492.

(Received April 26, 1990)

○ 川原健彰 手取川の植物 第1報～第5報 1986年3月, '87年4月, '88年3月, '89年4月, '90年5月発行, B5判. 69, 86, 75, 106, 104頁. 自己出版.

石川県能美郡川北町にお住いの開業医の川原さんが, 手取川の植物の観察記録をシダ植物から始めてキク科植物に終る順序で毎年1冊ずつの本にまとめられ, 今年で5冊目となった。調査の対象域は, 手取川右岸, 川北町・美川町・鶴来町・辰口町・寺井町・鳥越村地籍内の砂州および堤防を含む川原である。それぞれの巻頭には, 植物群落のカラー写真2～4頁, 白黒写真20～40頁が収められ, 第3報以下には一つ一つの写真の撮影データが一覧表になって, これに続く。第3報および第4報の巻末にはカラーの植生図, 第5報の巻末には広瀬大橋より下流域の重要植物と希少植物の分布図が折り込まれている。私たちの植物調査では, いきおい種類の豊富な山地へと足が向き, 平地や河原の植物は敬遠しがちで, 植物誌をつくる時などいつでもデータ不足となるが, その点この一連の著作は実にありがたい情報を提供してくれる。地についた自然保護は, 実はこのような足元の植物の地道な観察の積み重ねから生れてくるはずである。(清水建美)

aceae. pp. 384. Gakken. Tokyo.

摘 要

1973年10月から74年にかけて行われた日本モンキーセンター第二次アマゾン学術調査隊に参加した里見は、南米コロンビア領カクタ河の支流ベネージャ川の右岸に設けられた調査地(緯度0度西経75度付近、標高約200m、面積約20km²の低地熱帯雨林の林床)から、多数のイネ科タケ亜科植物の標本を採集した。これらの標本の同定を米国スミソニアン研究所のDr. E. J. JUDZIEWICZに依頼した結果、つる性木本の *Arthrostyloidium* 属2種をのぞいて、他はすべて草本性タケ類であることがわかった。それらは、*Olyra* 属2種、*Piresia* 属2種、*Cryptochloa* 属1種(以上オリラ連)、および *Pariana* 属4種(パリアナ連)と同定された。新熱帯の草本性タケ類は、花の構造が単性、1小穂1小花、あるいは2本から数十本のおしべを持つなど、高度に特殊化している反面、そのほとんどのものが、2倍体の染色体構成を持つことから、4倍体から6倍体の木本性タケ類に比べ原始的とみなされている。これらの標本の外

部形態が日本産ササ属植物に酷似するものが散見されるところから、本研究ではササ属植物の属の概念の概略を述べ、ミヤコザサの栄養体や数種のササ属植物の花序に関する観察結果を参照しながら、両者の外部形態を比較した。その結果、ササ属植物を特徴づける株立ち形成、節の膨出、1節1枝分枝、稈鞘の宿存性、肩毛の発達、広披針形の葉身、葉の細脈間の格子目の存在、さらに花序の発生部位などの諸性質を、数種の草本性タケ類が、互いに欠けた特徴を補い合うように所有することがわかった。更に、その1種で稈高18cmの *Piresia linearifolia* では、アジア産のいくつかの竹類に共通にしてみられるが、南米産タケ類ではこれまで、木本・高山生のタケ類において2例のみしか知られていない、amphipodial rhizome system (単軸性と仮軸性の地下茎を同一植物体を持つ形態)を持つことが示された。また、*Olyra latifolia* において草本性から木本性、単性花から両性花、など、幅広い種内変異を持つことが示された。

(Received June 2, 1990)

巨樹は人の一生と比べることが出来ない長い年数を生きながらえて来ている。これには地域住民の保護があったからで、間違いなく文化財である。最近、この価値が人々に認識されて来て、昭和63年度、環境庁では全国の巨樹・巨木林の現況調査が行なわれた。これが少くとも引金となったと言えようが、各地で巨樹を紹介する書籍が次々と発行されている。それらを列挙した。

○ 馬場 篤編 会津の巨樹と名木 会津生物同好会(〒965 会津若松市花巻町8番1号、振替口座郡山9477)、平成2年3月1日発行。A5判、324頁。定価3,000円(〒別)。

○ 東京都環境保全局自然保護部緑化推進室編 樹—東京の巨樹 東京都情報連絡室情報公開部都民情報課(〒100-81 東京都千代田区丸の内3丁目5番1号)、平成2年3月発行。A4判、92頁。頒価310円(〒別)。

○ 愛媛県林材業振興会議編 木と語る—えひめの巨樹・名木 財団法人愛媛の森林基金(〒790 松山市1番町4丁目4-2、愛媛県森林林業課内)、平成2年3月31日発行。B5判、146頁。定価1,800円(送料、税込)。

○ 中国新聞社編 広島県文化百選 (7)花と木編 中国新聞社(〒730 広島市中区土橋町7番1号、振替口座広島7-57)、平成2年3月30日発行。B6判、218頁。定価1,700円(〒別)。(里見信生)

○ 清水建美(編著) 乗鞍の自然 A5判、172頁。信濃毎日新聞社発行。定価2,200円(税込み)。

清水建美、豊国秀夫、吉田利男、相馬 潔、井上 健、山本雅道の方々の分担執筆による、乗鞍岳の自然誌である。執筆者はいずれも、乗鞍岳をフィールドとして研究をしてこられた各分野の専門家で、研究の成果にもとづいて、広範な読者を対象として、このユニークな地域の自然の解説に努められたものである。内容は「乗鞍の自然環境」、「乗鞍の植生と植物」、「ハイマツ生態系」、「動物の生活」、「開発の影響」の五つにまとめられているが、研究分野別に縦割にされないで、それぞれがいずれも総合的に扱われている点に特徴がある。たとえば、ホシガラスはハイマツ生態系のなかで取り扱われているがここではホシガラスが食物としてハイマツの種子に依存するとともにその散布に大きな役割を果している側面が重視され、ハイマツ生態系全体のなかでの位置づけが明確にあたえられている。近年、普及書の出版が活発になったことは喜ばしいかぎりであるが、研究者の問題意識が伝わってくるものは残念ながらあまり多くない。この労作はその意味で研究者にとっても啓発されるところが多く、また、積雪時のハイマツの写真など貴重な資料も載せられていて大変興味深い。(注文先：〒380 長野市南県町657、信濃毎日新聞社出版部) (古池 博)

○ 北陸でナガサキシダが採集された (小野ふみえ*・浜野一郎**) Fumie ONO and Ichiro HAMANO: *Dryopteris sieboldii* Found in Hokuriku District.

ナガサキシダ *Dryopteris sieboldii* (v. HOUTTE ex METT.) O. KUNTZE の分布図は倉田悟・中池敏之共著の日本のシダ植物図鑑 (第1巻, 486頁) に掲載されているが、これで見られるとおりに、本州では山口県を除くと点在する位で、産地は少ない。しかも日本海側には知られていない。

著者等は石川県河北郡津幡町内 (石川県石動山で、かつてオニクラマゴケが発見されたが、それを絶滅させてしまった前例を繰返さない為にも詳しい地点の公表をさしひかえる) で採集した。我々は初めて見るものであったから元金沢大学教授里見信生先生に見ていただいたところ、ナガサキシダであると同定され、思いがけない種類を石川県のフローラに加えることができ、喜ばしく思っている。(* 石川県教育センター, ** 石川県津幡中学校)



○ 中西弘樹 海流の贈り物 (漂着物の生態学) 平凡社 (自然叢書 15), 平成2年7月16日発行。B6判, 256頁。2,200円 (税込み)。

海岸を歩くと、近年は何処にもプラスチック製品・ポリ袋・流木に罐や瓶などで、汚れが目立っている。腐り難い化学製品が世に出ていない以前は流木を材料として拾い、おのづから清掃されていたし、罐や瓶などを抛棄するような忌むべき行為は少く、白砂青松の美しい景勝が保たれていたのである。

それはさておき、海流は種子・果実や幼植物を運び、植物分布の上で興味ある問題の一つである。私はかつて、書店の書架に、石井一忠著“漂流物の博物誌 (1977)”を見つけ、その晩一気に読了した。本著も同様、一息に読み終えたが、多くの方々に御購読をおすすめしたい本である。 (里見信生)

○ 奥原弘人 信州の野草 信濃毎日新聞社。1990年7月15日発行。A5判686頁。3,800円 (税込み)。

信州の植物研究の第一人者として知られた著者が、今度は大部な野草の写真図鑑全一巻を出版された。頁をめくるとはじめに保育社刊「検索入門」型の科または科群への検索表があり、続いて植物用語の図解があつて導入部分となっている。本文で扱った植物は、ほぼ1300種、1頁に大い2種ずつの写真と簡単な解説を入れるといった編集方式である。この本にはシナノキンバイを除き、高山植物は含まれていないので、信州の亜高山帯以下の草本はほとんど網羅されていることを示している。ただ、ルイヨウボタンの果実といった写真説明や、ヤマシャクヤクやシラネアオイが未だにキンポウゲ科に入られている点などは、専門家の手助けが必要な面だろう。また、写真の撮影者は明記されていないが、相当部分を岡谷市在住の今井建樹氏が分担されたと聞く。単なる謝辞以上の処遇が必要だったのではないかと思われる。いずれにしても、この本は著者の50年以上に及ぶたゆまざる信州植物探索の結晶であり、その該博な植物の知識には、改めて驚きを禁じ得ない。

○ 金井弘夫編 日本植物分類学文献集 目録・索引4 1945~1988 アポック社。1990年8月31日発行。A4判783頁。2,000円 (税込み)。

金井博士が、1935年に本文集の刊行に着手して9年3ヶ月、このたび第4集が刊行の運びとなった。第1集で採録された文献が1973~1982年、第2集が1973~1985年、第3集は1960~1986年のものであったが、この第4集では1945~1985年の戦後の43年間における文献約13000件が収録され、全4集の件数は4万件に達した。目録は著者名のアルファベット順による文献目録の部と索引の部の2部から成り、索引の部は植物群別、地域別、雑項目、人名、植物名各索引に分かれている。とくに便利なのは、索引の部で索引を組み合わせれば、誰がどこの何の植物についていつ何に書いているかが忽ち判明する。コンピュータ編集はプログラム作りと入力作業は大へんな仕事であるが、このように出来あがってくると何と便利なものかと思う。学生からの多様な質問に答えられるのもこの4冊が座右にあればこそである。金井博士の長年の御努力に対して心から敬意を表するものである。 (清水建美)

的に多いものの、オニグルミ、ヤマグワ、ハンノキ属、コナラ類、カエデ属など落葉広葉樹が13種類、針葉樹ではトウヒ属とスギの2種類が見られた。このことからいずれもが現在の東北・北海道地方に広くみられるヤチダモを主体にした冷温帯性の河辺林や湿地林で、A地点ではそのほぼ純林であることから、きわめて水湿に近いところに立地していたのに対し、B地点では様々な冷温帯性の樹種が多く混ざることから、前者よりはやや水辺から離れた所のものであったろうと推定された。また、現在では渡島半島中央部から岩手県早池峰山まで行かなければ見られないトウヒ属が当時の津軽平野の平地部に分布

していたことが分かったことは、植物相の完新世における変遷を明らかにする上で興味深い資料となる。

一方、これら埋没林が立地する地層について地質学的検討とともにその花粉分析も行った。その結果、津軽平野においては、上位沖積面を岩木川が下刻してできた解析谷底は約5000年前以降埋積されて下位沖積面が形成されるが、この埋積の過程で断続的にハンノキ属を主体にした湿地林の形成がみられ、今回調査した埋没林はそれらの中の一時期のものであることが明らかになった。

(Received May 28, 1990)

○阿部近一 徳島県植物誌 教育出版センター(〒771-01 徳島市川内町平石流通団地27),平成2年7月5日発行。A4判,580頁+写真・図版135頁。定価10,000円(税込み)。

私は昭和17年夏、愛媛県八幡浜出身の友人を誘って、剣山に登った。生憎、雨天で、ここで初めて御目にかかった御二人の方ともども外に出ることが出来ぬまま、山小屋に閉じこめられてしまった。この御二人は貝の研究で知られる黒田徳米博士と、御案内の為に御同行されていた阿部近一さんであった。私はこの時、阿部さんが昭和12年に発行された“阿部植物誌”を持参していたので、御両人が貝の話をしていているのを傍で伺っていると、この本の著者である阿部さんと結びつかなかった。しかし、その後間もなく、阿部さんの勝れた業績の一つであるタヌキノショクダイの発見が、陸貝の採集中であったことをうけたまわり、この発見が偶然でないことを知った。私もこの植物が見たくて、大竜寺山には再三登ったが、ある時、台風の通過直後に行き、倒木に着出していたヒトツバノキシノブを見つけたのは思い出深いことであった。余談はさておき、阿部さんは徳島県での植物だけでなく、動物にも御造詣深い大博物学者として敬服申し上げる方である。

本書は申すまでもなく、上述の“阿部植物誌”が源となっていると思うものの、その刊行より50年、半世紀の間積み上げられた該博な御智識の総集編として、世に問われた名著と確信するが故に、双手を挙げて御購読されることを御奨めする次第である。

○石川の生物編集委員会 石川の生物 石川県高等学校教育研究会生物部会(〒921 金沢市窪6丁目218,石川県立金沢錦丘高等学校内),平成2年7月31日発行。A4判,304頁+カラー写真版8頁。頒価5,000円(〒込み)。送金は北国銀行円光寺支店普通口座157-962,石川県高等学校生物部会(高木政喜)あて。

日本生物教育会第45回全国大会が、石川県金沢市で開催されるに当たり、これを記念し、石川県の生物相の概要を紹介する目的で編集された。

この企画はおよそ5年前にたてられ、以来、石川県高等学校教育研究会生物部会では研究グループを結成し、この出版に向って調査・研究を続けてこられた。執筆は部会員が、それぞれ得意とする分野を担当したことは勿論であるが、互に協力されたことにより、各部門が網羅され、広範な内容は出版を良く果されているものと思われる。特に私は編集に当られた委員各位の御苦心談をいろいろ伺っているだけに、その労を高く評価申上る者である。

○寺下友三郎 奥能登の植物 自己出版,平成2年8月30日発行。A4判,100頁+図版7頁(カラー2頁,白黒5頁)。頒価2,000円(〒込み)。

著者は教職40年。本務の余暇に、努めて奥能登地域の植物を見つけて来られた。本書は御退職を機会に、この間の知見をまとめて置きたいという、御考えから刊行を考えられたことと推察する。

内容は先づ奥能登の自然環境を、次いでその植生を記述し、終りに植物目録・巨樹目録となっている。

御入手御希望の方は著者宛(振替口座金沢8-15747)に御送金されると送本申し上げる由である。

○斎藤信夫 花神巡礼—草木との語り— たねの会(〒030-13 青森県東津軽郡蟹田町蟹田62-2),平成2年4月28日発行。B6判,213頁。頒価1,500円(〒別)。

毎年きまったように繰り広げられる色彩豊かなドラマは何者かが、後から糸を引いているようで、著者はその何者かを花神と考えている。本書は下北半島の植物が、四季の変化に対応しつつ、生活を続けている有様を、自分自身の目で確かめつつ記録した短篇集で、48篇収められている。(里見信生)

おける冷温帯—暖温帯境界は、現在よりも北にある幅をもってずれて存在したと推定される。またアズマネザサは、塩原の30万年前の地層から現在のアズマネザサに類似のもの（葉の形態より推定）が発見されたことから、アズマネザサに類似のものが現在の分布域に30万年前も分布していたと考えられる。

以上に示した本研究における結論の当否は今後における化石植物の研究によって検証されるであろう。

本研究において、論文作成にあたって御指導および助言いただいた；宇都宮大学教養部小林幹夫博士と宇都宮大学農学部大久保達弘博士に厚く御礼申し上げます。

野外調査にあたっては、元足利高校の青山俊吉先生、野沢鶴二氏、栃木県林務観光部の斉藤倫明氏、元函館営林支局の渡辺至氏、千葉大学園芸学部の武井和久氏に助力をいただきました。

また、東京大学農学部森林植物研究室梶幹男博士には、積雪深およびWIデータを本論文に借用することを快諾いただきここに記して感謝の意を表します。

引用文献

- 藤原一絵. 1986. 宮脇昭(編). 日本植生誌 (関東) 至文堂. 東京.
堀川芳雄. 1973. Atlas of the Japanese flora. 学研. 東京.
梶幹男. 1975. 房総半島におけるモミ林の生態学的位置に関する研究. 東大演報. No. 68: 1-23.
——. 1982. 亜高山帯針葉樹林の生態地理学的研究. 東大演報. No. 72: 30-120.
菊住昇. 1966. ササ類の地下部の構造. 富士竹類報

告. 14: 27-40.

気象協会. 1959. 最深積雪深図 (1,2).

気象庁. 1958. 全国気温資料. 月別累年平均値. 気象庁観測技術資料第10号.

日本第四紀学会. 1987. 日本第四紀地図. 東大出版会. 東京.

杉本順一. 1972. 新日本樹木検索誌. 井上書店.

鈴木貞雄. 1959. 関東, 東北地方におけるササ属およびスズ属の分布と生態(予報). 広島大生物学会誌. 10: 26-34.

——. 1978. 日本タケ科植物総目録. 学研. 東京.

鈴木時夫. 1972. 日本列島植生の特性と支配的環境要因について. カリ・シンポジウム 1971: 107-129.

豊岡供・佐藤明・石塚森吉. 1983. 北海道ササ分布図. 林誌北海道支場.

薄井宏. 1958. 太平洋—日本海気候境界における森林植生—男体山をのぞく奥日光の山岳森林. 日林誌. 40: 332-342.

——. 1961. ササ型林床優占種の植物社会学的研究—日本植生研究の造林学への応用. 宇大農学部学術報告特集. 11: 1-35.

——. 1986. 日光の動植物. 日光の動植物編集委員会編. 栃の葉書房. 栃木.

WATANABE, M., NISHIDA, M. and KURITA, S. (投稿中) Studies on the hybrid origin of *Sasaella* MAKINO. J. Jap. Bot.

山中二男. 1979. 日本の森林植生. 築地書館. 東京.

(Received March 15, 1990)

○ 駒止湿原保存対策調査会 国指定天然記念物 駒止湿原 福島県田島町教育委員会, 平成元年 3月発行. B5判, 159頁. 非売品.

「自然保護」, この言葉は言うのはとても簡単だけれども, 実行に移すのはどれほど困難なことだろうか. 私は昨年今年と, インドネシアのカリマンタンで植物の調査を行う機会を得たが, あれほど交通の不便な所であっても, 人為の及ばない手つかずの森林は極めて希少であることを実感した. 逆に言えば, 日本のような人のいっぱいいる島で, 本書が対象としている駒止湿原のような貴重な自然が, いまだ生き残っていることには, 心から感謝しなければならないのかもしれない. しかし, この湿原のおかれていた現状にもぞっとさせられる. 109~112ページおよび口絵には, 空中写真に基づいて, 湿原周辺での耕地の拡大の有様が図示されているが, まさにジグソーパズルのように湿地と耕地がからみあっているのだ. 本書は, このような危機的状況におかれた本湿原について, 植生等の基礎的資料を得ると共に, 適切な保護対策を提言するために企画されたものである. 基礎資料として, 湿原の地下構造, 地下水位, 植生区分および植生図の作成, トランゼクトによる植物の配列の解析, 湿原内針葉樹の構造, フローラの記述, 花粉分析による植生変遷の解析等がなされ, さらに人為による環境変化を検出する目的で土壌環境調査, 環境指標としてのヨシの生育調査, 水質調査が行われている. 各調査はきめ細く, 調査会の真剣さを感じることができる. この湿原の保護運動が, 単にこの報告書を作ったことで終わることなく, 報告書に述べられた方策が, 確かに実行されることを願わずにはいられない. (綿野泰行)

- 4 km メッシュマップ作成に関する研究—東北地方日本海側の部一、雪の基礎資料 6, 日本積雪連合資料 121.
- ・—, 1974, 年最大積雪深再現期間値, 積雪日数平年値の 4 km メッシュマップ作成に関する研究—長野地区(長野県)の部一、雪の基礎資料 7, 日本積雪連合資料 122.
- ・—, 1975, 年最大積雪深その他の積雪要素の 4 km メッシュマップ作成に関する研究—東北地方太平洋側, 長野県の部一、雪の基礎資料 8, 日本積雪連合資料 124.
- 松田義徳, 1981, 新潟県における「ラショウモンカズラ型」分布の植物, 新潟県植物分布図集 2: 411-422, コーエイ印刷(新潟).
- 中西 哲, 1959, 風穴で見られる蘇苔類の異常分布, 植物研究雑誌 34: 19-22.
- 日本積雪連合, 1974, 豪雪地帯における雪寒メッシュマップ調査.
- , 1976, 豪雪地帯における年最大積雪深, 積雪日数, 年最大降雪量の 4 km メッシュマップ作成に関する研究, 雪の基礎資料 9, 日本積雪連合資料 125.
- 沖田貞敏, 1986, 県北地方にみられる 3 風穴の植物について, 秋田自然史研究 20.
- 塩見隆行, 1973, 萩市笠山風穴地の蘇苔類, ヒコピア 6: 253-259.
- , 1977, 萩市笠山の蘇苔類, 山口女子大学研究報告 3: 1-10.
- 白崎 仁, 1982, マルバネコノメソウ, 新潟県植物分布図集 3: 107-108, コーエイ印刷(新潟).
- , 1893 a, ツルネコノメソウ, 新潟県植物分布図集 4: 167-170, コーエイ印刷(新潟).
- , 1983 b, 新潟県におけるネコノメソウ属の分布, 新潟県植物分布図集 4: 412-419, コーエイ印刷(新潟).
- , 1984, エピゴケの生態分布, 植物地理・分類研究 32: 59-67.
- , 1985, 苗場山のコケ植物(長野: 秋山郷, 新潟: 赤湯道), 長野県栄村自然調査記録 I(栄村の植物分布 I), 長野県下水内郡栄村教育委員会, 97-122.
- , 1990, コケ植物の生態分布 1, ウマスギゴケとオオスギゴケ, 植物地理・分類研究 38: 27-41.

(Received April 17, 1990)

○ 長田武正 日本イネ科植物図譜 B5判, 759頁, 1989年12月5日, 平凡社, 17,510円。

昨(1989)年12月に, 実に本格的な日本のイネ科の本が出版された。はじめの38頁にわたる花序と小穂の形を組み合わせた著者の創意になる図解検索表に続き, 74~735頁の各論が本書の主要部をなす。この各論ではタケ亜科タケキビ連タケキビ属に始まりキビ亜科ヒメアブラススキ連ジュダン属に終る331種が, 左頁に和英両文の解説, 右頁に自筆による(2図を除く)全形と各部の線画という方式で取り扱われている。それらは, タケ, ササ類を除き外来種を含む日本産(小笠原・奄美・琉球は原則として含まない)のすべての種類を含み, 各種の特徴の記載のあとには必ず花期・同定のかぎ・分布・ノートなどのコメントがあつて全体をきいた解説書たらしめているのが嬉しい。種の配列は, CLAYTON & RENVOIZE (1986) の6亜科方式の体系に準拠しており, 目次と兼用する方式でこの体系が示されている(亜科がすべて Subgen, とミスタイプされている)。CLAYTON の体系の紹介といい, ヒゲナガコムススキを *Stipe alpina* とし, ナギナタガヤ属 *Vulpina* を認めるなど綿密な学名の考証といい, この本の価値を遺憾なく高からしめている。残念ながら, 私が発表したシロウマノガリヤスや帰化植物のニセシラゲガヤは認めてもらえなかった。(清水建美)

○ 深沢和三編 樹木の年輪が持つ情報(解析技術と林業への応用) 1990年3月, A5判, 141頁, 頒価2,000円(千込み)。入手希望の方は〒060 札幌市北区北9条西9丁目, 北海道大学農学部木材理学教室, 前川氏(TEL 011-716-2111 内線 2815)まで。

最近, 年輪年代学の考古学への応用や, 年輪気候学による気候変動, 大気汚染の研究などが活発になされるようになってきたが, その基礎となる年輪の持つ情報を如何に汲み取るかについての基礎的な研究は日本ではまだ萌芽的である。本書は文部省の科学研究費による研究の成果報告書を増刷して広く一般の人たちの需要に答えたものである。8章からなり, 第1章に年輪とはなにか, どうやって出来るのか, どのような変異があるのかなどが, 平易に, しかも実に美しい顕微鏡写真を多く使って解説されている。2章は年輪解析の実際的方法が詳しく述べられ, この両章がいわば基礎で, この部分で本書の約半分を占めている。3章から7章までは林学, 林産学への実際の応用の例がのべられている。8章はこれらの年輪情報に基づく研究の今後の発展のために年輪情報システムの構築が提案されていて, そのあとに引用文献が詳細に記載されている。林学・林産学分野の人たち13名で執筆されているのでどうしてもその方面の内容が中心になっているが, 植物学を研究する人や一般の人が「年輪」学を理解する上で, たいへん手ごろな本であると思う。(鈴木三男)